

## 角館——伝承と觀光

神代 雄一郎



角館町屋敷割絵図(享保年間)

かつて角館を訪れた斎藤茂吉は、「年ごとに枝垂桜を咲かしめて 京をしのびし」という女ものがたり」と歌っている。いまもはっきり残っている、城下町角館の町割りをしたのは芦名義勝だが、そこに文化の花を咲かせたのは、芦名家断絶後の明暦2年(1656)、ここに居を構えた佐竹義隣にはじまる。佐竹北家であった。義隣は、高倉大納言永慶の第二子として京都に生まれ、のち佐竹家の養子になった人。また義隣の子義明は、その室に京都の公卿三条西実号の女を迎えていた。親子二代にわたる、佐竹家と京都との結縁は、角館がいま「みちのくの小京都」と呼ばれる由来を実証している。はるばる京都から、角館の佐竹義明に嫁入りした夫人や、それに従った女たちは、この地に枝垂桜を植えて故郷をしのんだ。その枝垂桜が、153本の巨木に育って国の天然記念物に指定され、毎春、かつての武家地に花を咲かせている。茂吉が「年ごとに枝垂桜を咲かしめて 京をしのびし」という女ものがたり」と歌ったのは、この伝承に情を動かしたことであった。

芦名義勝が、それまで古城山の北側にあった城下を南に移し、自らもその南麓に居を構えて移り住んだのは、元和6年(1620)といわれる。北端に城跡の古城山があり、その南麓に殿様の居館があって、そこから東の花場山、西の榎木内川に挟まれて内町と呼ばれる武家町が南下し、東西の山と川が一番近づいたあたりに火除けと呼ばれる広場(防火帯)を挟んで、その南に外町と呼ばれる町人町がつくられた。この単純明快な小城下町の構成について、芦名氏当時の資料は乏しいが、佐竹北家の時代につくられた4枚の大きな古図は、いま角館図書館に保管されている。とくに享保年間の絵図は秀れていて、その町割りが、現在の角館町に少しの乱れもみせず受け継がれているのは、驚くばかりである。それは、明治38年の奥羽本線の開通の際、この町が路線から取り残されて、経済的停滞を余儀なくされたことにもようが、また、昭和8年の皇太子誕生を記念して榎木内川畔に植えたソメイヨシノを、延々2kmにおよぶ花のトンネルに育てあげ、国

表町下丁、東側連続立面

著作権所有者の許可を得ていないため表示できません

の名勝に指定され、テレビドラマ「雲のじゅうたん」の舞台に登場させたことで象徴される、地元町民の姿勢によるところが大きいだろう。この町割りにはじめて注目し、建築学的な調査をしたのは藤島亥治郎であり、それを聴いて秋田生れの大江宏が心ひかれたのは当然である。昭和30年代の話である。

城下の町づくりをやり、新田開発に力を注いだ芦名氏にかわって、佐竹北家は文化や産業を角館に加えた。京育ちの佐竹義隣や、京から室を迎えた義明、京をしのんで枝垂桜を植えた女たちの話は先に述べたが、彼らはまた、この城下に京都の地名を配布した。まず、町の中央を流れる小川は鴨川と命名された。この名はいま残っていないが、東の山は京都の花頂山に比見されて花場山と呼ばれ、頂上に東屋がつくられた。檜木内川の西の、こんもりと姿のいい山は小倉山と呼ばれ、東の花場山、北の古城山とともに、いまも町民に愛されている。これらの山水に囲まれて、町割りだけでなく町の様相も城下の時代をしのばせるのが、巨木の枝垂桜が花開く内町(武家町)の部分である。桜ばかりでなく、ここにはモミの老樹をはじめとする124種もの樹木が茂り、黒塗りの透し塀や篠子塀が断続し、薬医門が開き、その奥に武家屋敷や文庫倉が点在している。近づいてよくみると、門わきの道路には馬をつないだ石枕や、馬にのるための踏石が残っている。塀には格子の入ったのぞき窓があつて内からすだれがさがり、格式の高い武士や領主を門を出て迎えることのできなかった家人や女たちが、そこからぞいていた姿さえ、しのばれる。深い前庭を正玄間に向かうと、そのむくり破風には大きな懸魚がついて、彫刻のなみなみでないわざが、ここにいたえもつ文化の厚さの一端をのぞかせている。座敷に上がると、そこには雪国特有の土縁が回っていて、それを背に床の構えをたしかめるのも、また下屋半間を板縁、残り半間を土間にしたこの土縁を透かして、前庭の茂りを眺めるのも楽しい。とくに内町の中央を南北に通る道の両側、表町・東勝樂丁の辺りに、こうした遺構は集中していて、この部分は昭和

51年、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。文化財保護法が改定されて、はじめての選定に選ばれたもので、昨秋大江宏の設計で完成した伝承館は、この地区的どまんなか、表町筋と東勝樂丁筋とがちょっとはずれて、城下町特有の丁字形の交わりをみせる、その角地に建ったのである。

佐竹北家は、角館に文化や新しい産業をおこした。たとえば、秋田に藩校ができた4年後の寛政5年(1793)、佐竹北家邸内の一室では、郷校弘道書院が開かれる。校舎は5年後東勝樂丁に、今度大江宏が伝承館を建てた場所の道を隔てたすぐ南隣につくられ、多くの学者を藩校に送った。また、佐竹の殿様は芸術好きで、狩野派や四条派と係わりをもち、なかには殿様芸とはいえない力量を示した人もあるという。多くの画人が育ったが、なかでも平賀源内に見出され、江戸にて杉田玄白の「解体新書」に插画を描き、洋画を学んでついに秋田蘭画を創設した小田野直武は著名である。直武の画業をひろく世に知らせた平福百穂も有名で、彼は新潮社を起こした佐藤義亮、美術ジャーナリストとして活動する田口潤汀とともに、あい前後して角館を出て東京で活躍する。いまでも学者として、コレクターとして美術の世界で活躍する人が多いのは、角館文化の特色だが、これについては次の機会を待つことにしよう。

秋田藩が「三木」と称して、桑・楮・漆の栽培植林を奨励したことは、角館の産業と深く係わっていたと思われる。桑は、角館に始まる秋田八丈につながるし、楮は北家の直接指導した鎌足紙を思い出させ、漆は角館春慶塗を考えさせるからである。しかし角館の手工業でいまもとくに注目されるのは、白岩焼と樺細工である。白岩焼は明和8年(1771)、現在の角館町内白岩に瀬戸窯が築かれて始まり、最盛時には6基の大登窯で焼かれる繁栄をみせるが、明治になると藩の保護を失い、加えて地震のため窯が破壊し、数々の名品を残して衰退した。しかし近年、県が史蹟に指定する窯跡近くで、その復興が始まっている。これにひき比べて、ヤマザクラの皮を

用いた樺細工の継承発展はめざましい。天明年中に北家給人藤村彦六が阿仁からその技術を伝授されたというから、近く創業200年の歴史を誇ることになる。北家の下級武士の手内職として発達し、明治以後禄を失った士族によって専門化され、職人業となって、柳宗悦らの指導もあって着実に発展した。その職人道に徹した名品には眼をみはるものがあるが、昭和49年「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」が制定されると、51年、角館の樺細工は伝統的工芸品に指定されたのである。

\* \* \*

「年ごとに枝垂桜を咲かしめて 京をしのびしといふ女ものがたり」と歌った斎藤茂吉は、また「武士町の家のつくりのなごりをも めづらしくして人に物いう」という歌をつくっている。明治38年の奥羽本線開通から取り残された角館は、戦前戦後の工業開発をのがれ、経済の停滞に耐えながらも、その「花」を伝承し、城下の「町割り」を継承し、美術や「樺細工」を発展させてきた。高さ20mを越す大置山が設けられ、十数台の曳山がぶつかかりあう豪快な祭も絶えることがなかった。その曳山には、百穂の父平福百穂によって明治初期につくり始められた、平福人形が乗っているというう具合である。その角館にとって、昭和51年、武家町の中心部が「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、樺細工が伝統的工芸品に指定されたことは、一つの画期であった。町はすぐさま伝統的工芸品産業樺細工の振興計画をたて、伝承館(伝統産業会館)の建設を計画した。県はまた、東北新幹線の開通を見通して、田沢湖・角館・秋田の観光拠点施設として、ここに「ふるさとセンター」を合わせて建てることに踏み切った。敷地は、樺細工が武家の手内職に始まったことにちなみ、また旧武家地に観光の活気を加えるために、「重要伝統的建造物群保存地区」のどまん中、小学校跡地に決定した。昭和52年初めのことである。

当時京都では、伝統産業会館が先がけて完成していた。信楽ではその第2号が建設中だった。しかし角館のように、伝統産業会館を重要伝建群保存

地区内に建て、しかもそれに県の観光拠点施設を加えるという例は、全国どこにもない、文字どおり初めてのことであった。通産省と文化庁と秋田県の事業が係わりあい、それを実行する角館町はまた、先に述べたように厚く深い文化を継承する土地柄である。当然一流の建築家が必要だった。しかもその建築家は、まず、「花」の判る、「花」を知る人でなければならなかった。敷地には「京をしのびし」枝垂桜があり、加えて敷地内の樹木は1本も伐ってはならない条件がある。次に、樺細工や白岩焼の判る人、手仕事に愛着のある人でなければならない。この場合、どこかの伝統産業会館のように、その産物を無定見にはりまわせばすむというものではない。さらに、古い町割りや、武家屋敷や町家の群造型にも理解のある人でなければならない。ことは雪国、小さな美しい旧城下町で起こっていて、敷地は重要伝建群保存地区のまんまん中である。総じていえば、ただ建築だけに限らず、すべての文化の、文化の総体の伝承を肌で感じ知っていて、その文化の継承の中に自身の建築作品をつくり置ける人でなければならない。しかもこの建築は角館に建てられながら角館だけでなく、広く日本の文化の伝承のありようを、また同時に観光の質や方向を、決定づけるものと考えられた。

完成した「角館樺細工伝承館並びにふるさとセンター」を眼前にし、不可能かと思われたほど切りつめられた設計施工期間内での建設経過を回想して、ふと最初に想い起されたのは、大江宏が工事入札に当たって、この工事には角館を中心とする地域の、材料と産業と労働力を可能な限り使う、という条件を提示したことだった。伝統的建造物群も伝統的産業も、長い大工業開発時代の果てに、日本の中の地域のありようが問われて生まれたものである。ようやく明るみに出た地域主義の思想が、新しい建築の建設の中にどう消化され具体化されるのか、それはいま建築界の貴重な課題であり、大江の提示した条件と、これを請けた大林組の現場のありようは、まずこの建築の成功を確信させるものだった。

大江宏は、そうやってつくられる、そうやってつくれる建築を設計していたのである。現場には、列柱に組み立てられる、あるいは破風や庇の鼻に取り付けられる、プレキャストされたコンクリート部材が転がっていると同時に、秋田地方でなければ手に入らない、巨木から仕立てられた大円柱が、総合研修室のステージの両側に立つのを待っていたり、角館でなければ出来ない、桜皮を張った床柱が、地元の職人の手で組み込まれるまで寝かされている、そんな風景が見られた。

全体の建築のありようを、大江宏は伝建群の環境にうまく対応させて、表通りからできる限り後退させ、同時に通りに近い部分は高さを低くおさえている。しかも、全体が巨大なマスを感じさせないように、それはまず、平面を使用機能によって分類部屋分けし、ほとんどその一つ一つに固有の屋根を構想したうえで、それらを中庭を巡って配列し、使用動線に対応させながらタイ・アップしたように見受けられる。この全体構成の、平面と立体の、機能と意匠の、有機的なしめくくり方はまさに見事である。それは外観だけでいえば、武家屋敷の入母屋造の葺葺屋根や、内町の文庫倉や外町の米倉に見られる土蔵のゆるい勾配屋根から発想されたと思われる幾つかの屋根のタイプ、外町（商人町）に僅かに残っているコモセ（小店）やガンギカ、あるいは武家屋敷の土縁から発想されたと思われる列柱、土蔵造のままといついい資料室や研修室の一部、小田野直武の秋田蘭画の背景になった世界をしのばせる洋風ディテール、それら時間を超えて現に渾然としてあるものが、一つの新建築にしめくくられ統合し終えている姿である。だからこの建築を見ると、たとえば、屋根とはこんな有難いものだったか、ということがよく判るし、新しい建築は、屋根を排除しては生まれないだろう、とさえ思われてくる。

内部でドラマティックなのは、観光関係の中心になる観光案内ホールと、研修関係の中心になる総合研修室である。観光案内ホールの造型は、この建築へのアプローチで眺められる列柱や煉瓦壁やブラインド付窓や、玄関

のアーチや尖った破風で用意されて、そこを抜けて左に折れると、パッと予想外に背高い空間で展開する。煉瓦タイルを張った外側の壁、その内側に黒い木柱や木部で支えられた白壁がアーチを重ねて、きわめて律動的である。角館の樺細工を長年指導した三輪智一による、部厚い膳板のテーブル、黒い曲木の椅子も、この律動的空间によく呼吸を合わせている。もう一つの、200人を収容する総合研修室の内部は、この地方の豊かな木材の、今後の使用方法を教示しているように眺められる。ステージ両側の巨木の円柱は、良質のムクの材料をそのまま豊かに歌わせることを、2階回りの手摺は細かい薄い材料を一つのパターンにちりばめて、これは鉢巻のように高い空間をしめくくっている。こういう内部のドラマに挟まって、ある場所では中庭が眺められ、また資料室を結ぶ2階ホールからは花場山が遠望されるという具合で、またドアの把手に使われた白岩焼、研修和室で最小限に使われて最大限の効果を上げている桜皮細工など、ディテールへの興味も加えて、巡路に従って展開する内外のドラマの結果ぶりは、驚嘆に値する。

大江宏が、佐竹北家の殿様の居館の門を、1枚の黄ばんだ古い写真から復元修景したという、真新しい伝承館の門をくぐると、左手に列柱の連なりから尖った玄関の妻壁が見え、右手からは桜の巨木が枝を垂れている。この仕上がったばかりの建築は、まだ一度も花の季節を迎えてないが、それだけに一層、枝垂桜と取り結ぶ風情が待たれてならない。それは、京都の王朝風の甘いものでもない、角館武家屋敷の古いものでもない、花と建築との現代の対応を見せてくれるだろう。それこそが伝承の本当の姿だと考える。そしてそれは、能の「花」をいい、京北の常照皇寺に「花」を訪ねる、「花」を知る大江宏によって、はじめて可能な仕事であった。

〔参考文献：角館町教育委員会「角館の文化財」「角館町武家屋敷町並」。角館図書館「昔の角館」。桂の里社「里」No.5, 7。「しだれ桜」No.1, 3。角館町商工観光課「みちのく秋田・角館」〕